ヤール湖千仏洞の調査報告

山田勝久

一、はじめに

トルファン[1]（吐魯番）の地では、ベゼクリク千仏洞や勝金口千仏洞や吐峪沟千仏洞は、観光地として開放され多くの外国人に知られ、写真集や研究書も多数発行されている。それに対して、ヤール（雅尔）湖千仏洞は未開放遺跡として、内外の研究者の調査が厳しく規制されている。私は、シルクロードの古代遺跡の調査を四十七回にわたって続けてきたが、幸いにも一九九六年十二月より、今は亡き柳洪亮トルファン博物館元館長の案内で、千仏洞を調査することができ写真撮影も許可された。

三二七年（東晋の咸和二年）、『初学記』巻八によれば、前涼の張駿は、トルファンを支配下に収めると、交河城から高昌壁に政治や経済の中心を移した。後の支配王朝である前秦、後涼、西涼、北涼も高昌壁に軍を置いた。以後、『晋書』張軌伝に「以って其の地、高昌郡と為す」との記述の如く、高昌の名はこの盆地を支配した王国の名前となっている。

ところで、四五〇年、北魏の攻撃を受けた沮渠無諱は、河西回廊からトルファンに逃亡、この地によって自立した。

四六〇年、沮渠無緯の死後も仏教は保護され、政治的には柔然による安周の殺害と闕伯周の即位、その後、首帰、張孟明、馬儒、麴嘉、麴堅などの漢人系の王がこの地を治めたが、いずれも敬虔な仏教徒だったこともあり石窟は賑わいを見せていた。漢人も回鶻人など少数民族と共に参詣していたことが、壁画の題記によってうかがえる。

六四〇年、高昌国[2]が唐によって滅ぼされた後も、ヤール湖千仏洞は駐留する中原の兵士が仏教徒であったので、石窟は参詣者で満ち溢れていた。安禄山の反乱以後、唐の勢力が西域から後退すると、チベットやウィグル等の諸族が進出し、八四〇年には古代ウィグル族の一部が、北部高原よりトルファン盆地に侵入してきた。

ウィグル族が本格的にトルファンに住み始めたのは、九世紀後半になってからである。その昔、彼らの祖先は丁零人と呼ばれ、天山山脈の北のジュンガル盆地からバイカル湖近辺にかけて遊牧を営んでいた。八世紀中頃に、蒙古高原に汗国を建国し、唐王朝の安定に貢献、玄宗から「回旋すること軽捷にして、鶻のごとし」と評せられたことから回鶻と改名した。

ところで、前漢時代にトルファン盆地を支配していたのは、塞、のちに車師（姑師）[3]と呼称された車師前国である。前二世紀、都の交河城を、『漢書』西域伝は「車師前国、王は交河城に治す。河水分流して城下を繞る。故に交河と号す。長安を去ること八一五〇里」と記している。ヤール湖から流れる二つの河、ヤルナーズ溝に挟まれた高さ三十メートルの台地の面積は、約五十万平方メートル、建造物の敷地面積は三十六万平方メートルもある。地元の牧人は交河城を突厥語の「崖城」を示す言葉、「ヤルホト」（雅尔和図）と呼んでいる。

ところで、交河故城はほぼ南北に軍艦の形状で横たわり、長さは一六五〇メートル、東西の最も広い幅は約三〇〇メートルである。建築遺構のほとんどは、地面を削り込む方式で造営されている。南部は官庁街と居民区、北部は寺院区と墓地に分けられ、城門は南、東、西の三カ所にある。大仏寺、西北小寺、東北小寺、塔林などの仏教遺跡は五十一ヵ所[4]あり、総面積の十二パーセントを占めていた。東北部には宿坊も造営されており、出店が並んでいたことが

柱基と出土品によって判明した。

一九九四年六月、交河故城の北部古墳群より五室からなる地下寺院が発見され、私も窟内に入ったが絵画の構成や顔料の分析から、八世紀から九世紀にかけての造営であることが分かった。また、東側の室の状態が住民の生活様式となっていることからして、この地下寺院は初めは住居であったが、しだいに寺院へと変化していったことも判明した。ここからは、外は銀、中は銅の舎利箱と舎利三個、仏頭、念珠玉約千個、麹氏高昌時代の仏像なども出土し、チベット仏教の影響を受けた釈迦説法図の壁画もあった。また、一二〇の供養墓碑も出土し、その数は偶然にも墓の中に埋葬された死者の数と同じで、そこには埋葬年月日と生前の官職が明記されていた。

二、ヤール湖千仏洞について

ヤール湖千仏洞[5]は、トルファン市の西方、約十一キロの該県三区六郷ヤルコ村に位置していた。交河故城北端からヤール湖千仏洞までは、北西に約一六〇〇メートル、途中の河床の幅は約二〇メートルから三〇メートルほどであった。河岸から千仏洞までは約八五メートルあり、地上から洞窟までの高度は約十五メートル、丘陵の頂上から洞窟までは約四、五メートルである。窟の入口のすぐ上部には、昔は堅固な日除けがあったらしく、一辺が八～十センチの四角い孔が六個、直径十五センチほどの丸い孔が七個あいていた。そのすぐ上には小さい孔が平行に八二個あいており、創建当時は精緻（せいち）な庇（ひさし）が整然と建ち並んでいたことが分かる。

千仏洞の、東西の長さは約六五メートルあり、現存する窟は七窟である。壁画の総面積は約一六〇平方メートル、窟の前に幅約五メートルの長方形の平台があり、そこから河谷に通ずる階段になっている道が正面右にある。

第一号窟は、ヤール湖千仏洞の中にあって、唯ひとつ側室を有する窟で、従券頂と呼ばれる主室と東西にのびる側室は、ほぼ同じくらいの面積である。長方形の主室の奥ゆきは約五メートル、幅は約三メートル、高さは三メートル

余、主室の奥の左には、二号窟に通ずる門口がある。西壁の奥の右にある孔は、横券頂である側室に通じており、長さは六メートル余、幅も高さも約四メートル、ほとんど毀損して壁画はなくなっていた。

主室の後壁には、一条の赤い枠線と大きな赤色の漢文題記の跡があり、「形」・「正」・「被」といった文字がやっと読める以外はほとんど消滅していた。同じように、左壁にも赤色のウィグル文の題記があったが、これも判読することはできない。側室の東壁よりうかがえる三層の草泥により、この窟が何回か修復されていることが分かる。

第二号窟は、北東に横たわる長方形の従券頂と呼ばれる窟で、長さが約五メートル、幅が三・五メートル、高さが約四メートルある。北壁の窟門がやや東に向いており、その西側には一つの小さな室が鑿たれていた。窟内に壁画はなく、壁には草泥を塗り付けた後、石灰を塗りいつでも絵が画けるようになっていた。後壁と窟孔の西壁に、点在する赤色の漢文題記があったが、文字は判読できない。

第三号窟は、長方形の窟で第二号窟とほぼ同じ形状となっていて、長さ五メートル余、幅四メートルである。高さ約四メートル、北壁の窟門はやや東に向いており、その両側には小龕が鑿たれていた。

西壁の南端には「粛州中菅、官隊□奉楊□□専□朱□□□光、馬伏龍李玉朱甫張□井要龍、康熙六十一年十月初、八日到此□□」と六行書かれていた。河西回廊の粛州からやってきた軍人の、馬なる人物が、清の康熙六十一年（一六七一年）十月八日にこの千仏洞を参観し、記念として壁面に刻字したことが分かる。

第四窟は、ヤール湖千仏洞の中心窟で、左右対称の広大な従券頂と呼ばれる窟である。北東の中部に窟戸があり、主室の奥行きは約一八メートル、幅は四メートル余、高さは四・五メートルであった。主室の後方に位置する小室の長さは約四メートル、幅は約三メートル、高さは約三メートル、主室の奥の両側には左右二個の対称の修行窟があり、高さは四メートル余ある。一室が草泥を塗り、残りの三室は土壁であった。説法図にアーチ状の頂に千仏を描いて、説法する仏は蓮華座に座り、傍らに聴聞する僧たちがいる。

主室にも後室にも鮮明な色彩の壁画が残存し、その総面積は、約一一〇平方メートルもあった。主室の両側は大型の説法図で、絵はみな上下二層、一層には十一幅の壁画があり、上部は残り下部の多くは毀損していた。

この壁画の特色としては、それぞれの説法図の中間に蓮花座に坐した仏を描き、周囲に聴聞する菩薩や弟子たちの姿を描いていることである。側壁と天井部分の相交わるところには、縦向横幅垂帳紋の図案が一条美しく描写され、窟門の西側の内壁には六人の比丘と、長袍を身につけた高昌王国時代のウィグル人の男女供養人像があった。黒髪は肩にたれ下がり、両手を合わせ、また、正面の壁門の両側には、観普賢菩薩行法経で説かれる普賢と文殊師利の二菩薩が描写され、窟門の頂部には、身体が条幅式で怪異な座った僧像が画かれている。

主室の東西と後室の壁画は切り取られ、後室の正面の主菩薩像は、ただ塑像の一仏の光背のみが残っていた。この後室の東側の壁にも、二行の回鶻文の榜題がある。西側の壁画の上部には、礼仏図が描かれており、前端には雷公と霹靂とが描かれ、東側の壁には菩薩像が描かれていた。門の通路の西内側には男の供養人が、通路の東内側には龍王が描かれ、窟の天井には千仏が描写されている。仏は両方の襟をゆったりと垂らした礼服を身につけ、蓮花座の上に坐っている。

窟内の東側の内壁には、ウィグル女の供養人像が二体あった。上部の一体は頭部が毀壊しているが、身体には紅色の通裙大襦を身につけ、長い紅色の絹を身体のうしろに一条なびかせ、中ほどで美しく花結びをしている。下部の一体の顔は良く残っており、髪を丸く結んでいるものの、冠をつける部分は既に朽ち果てていた。背中に一条の長くて紅い絹の広帯を垂らし、中間で花結びをしているものの、腰より下は欠落している。

第五号窟は、長さ約六メートル、幅約三メートル、高さ四メートル余の長方形の従券頂で、西に偏った窟門を入ったすぐ左側、すなわち東壁の内壁に小龕が鑿たれていた。窟内に壁画はなく、ただ草泥を塗ってあるだけである。西壁に赤色の三行の漢文題記があり、「提記為見仏聞・・・・・・、師提記耳・・・・・・、任子年七月□日」と判明

できる。また、六世紀から九世紀の突厥文題記も四行あったが、ほとんど読めない。しかし、このことは六朝から唐代にかけて、漢語と突厥語がトルファンでは共に使用されていたことを示している。

窟門に近い北部には、岩石画のように二匹の羊の絵が彫られ、門戸の東側壁上には赤色の漢文題記が数行あり、「到此西谷寺」の文字が読みとれる。これは当時、この窟が交河城の西の河谷にあったところから、西谷寺と名称がつけられていたことを物語っている。

第六号窟は、長さ約五メートル、幅約三メートル、高さ約四メートルの従券頂と呼ばれる窟で、北壁の窟門は少し西に偏り、東壁の内壁には小龕が彫られていた。窟内にはほとんど壁画はなく、ただ東壁には赤色の描線で画いた比丘一人の頭像を見ることができるのみである。土壁は草泥を塗ってこねまわしてあり、正面つきあたりの後壁のまん中には、仏像の光背の上部のみが残存していた。

第七号窟も従券頂と呼ばれる窟で、北壁のまん中に入口があり、奥の長さが五メートル余、幅が三・四メートル、高さは約四メートルであった。窟に塑像は残っていないが、四面と門洞と天井に維摩詰所説経で説かれる花雨などの仏教壁画があり、その総面積は約四五平方メートルにも及んでいる。

千仏の形は二種類あり、一つは円領通肩式の大衣を身につけ、頭上に傘のような華蓋があるもの、いま一つは、双領下垂式の天衣をつけ、頭上に菩提樹のような華蓋をつけたものがあり、この二種類の千仏は、みな蓮花座の上に坐っている。天井には一仏二菩薩を描写した一幅の壁画があり、上下両側には藤蔓が描かれて、窟戸の内側の壁画は、緑と藍の二色を中心とした供養人像が描かれていた。これはクチャのキジル千仏洞の第二、三期の壁画の技法と同じである。また、ベゼクリク千仏洞のウィグル時期の画法と類似している。

ところで、漢文だけでなく突厥や回鶻などの言語が壁画の中に散見できるということは、極めて注目に値する。このことは、たとえ政治の支配者は交替しても、時の指導者は自らの言語の使用を、支配したところの砂漠の民に強要

したわけではなかったということ、各民族の固有の言語や文化を尊重し、何よりも共に大乗仏教を信ずるところからくる、親近感に貫かれていたことを示している。

次に、ヤール湖千仏洞が造営された年代はいつかという問題であるが、まず、最初に考えられることは、二、三十人の修行者の日々の衣食の充足が必要という点から思いを馳せれば、交河城が都市としての機能を果たしている時代、すなわち供養者が多く存在していた時に穿たれたと推断できる。それは歴史的には、四四一年に北涼の残党が攻撃してくる以前と考えられる。石窟は窟数こそ七窟と少ないものの、一つひとつの洞窟は華麗であり、色彩も豊富で高度な技術によって構築されている。しかも、一号窟から七号窟まで、同時に設計され開鑿されており、このことは、相当の権勢を有する支配者でないと、造営は不可能である。大量の顔料と画工たち、そして数十人の作業員の長期間の動員などを考えると、石窟を造るということは、膨大な経済力を必要とする。戦乱の時期や、国力の衰退期にできることではなく、王国の隆盛期に造営されたと考えられる。また、壁画に描かれていた供養人の髪型や服装、題記の複数の言語、近辺から出土した仏教経典の書写の年代等を考え併せてみるに、ヤール湖千仏洞の穿たれた時代は、車師前国の三二七年から四四〇年頃と考えられる。その後、部分的には改修が加えられていったと思われるが、重修の程度から推察するに、原形を修復する程度であったようである。

しかし、十一世紀前後の回鶻高昌の時代、再び脚光を浴びたらしく、朽ち果てた壁画の上に再び白土を塗り、仏教壁画を描いている。例えば、四号窟を調査してみたが、壁画の下に古い壁画があることが確認でき、下地は六世紀のものであり、表層は十一世紀のものであった。

十五世紀中頃、イスラム教の本格的な西域流入とともに、壁画も塑像も破壊され忘れ去られていった。なお、窟の中より、清の康熙や乾隆の年号が散見できるが、これは信仰心からの参観ではなく、単なる清朝の国境守備隊の物見遊山の落書きである。しかし、ヤール湖千仏洞の窟内の壁に訪問の年号が明記されていることにより、当時の中原と

トルファンとの政治的な関係を知る上で、貴重な歴史的資料といえよう。ともあれ、千仏洞の窟内は高昌人の、ベゼクリク千仏洞とは若干異なり、車師人の文化と伝統を色濃く残している仏教拠点となっていたことが判明した。

注

（1）「トルファン」の地名は、元代より以後の呼び名で、ウィグル語では、トルは「のろし台」、ファンは「城・住めるところ」の意である。はじめは「土乱翻」と表記していたが、これは「濛々と埃が立ち上がっている所」の意で、侮辱する表現であったため「吐魯番」と改められた。

トルファンは、前漢時代はアーリア系の遊牧民が住んでいた。シルクロードの要衝であったことから、出土する古文書は、カローシュティー、トカラ、ホータン、サンスクリット、チベット、パスパ、西夏、ウィグル、ソグト、パルティア、漢、ペルシャなどの文字で書かれており、異民族が往き交う文明の十字路だった。多くの人々がこの盆地に集まったのは、土地が豊かであり、経済が安定していた為でもあった。『魏書』高昌伝には、「気温が高く、土地は肥えており、二毛作であり、養蚕や果実に適し、人口も多い。灌漑水路があり、蜜も塩もとれ、ブドウ酒を産出する。住民は天神に仕え、大乗仏教を信仰している」とある。

なお、七〇三年（唐の長安三年）の書写である「董文徹牒文」には、仏教の慈悲の思想が民衆の生活の上に実践され、役人が少しでも農民の負担を軽減させようと必死になって努力している姿勢がよくうかがえる。それに対して敦煌は、スタインやペリオ文書に示されるように、僧侶と役人が結託して、善良な住民に布施を強要し続けていた。民衆は権威や権力による弾圧から逃れるため、はるばる白龍堆を越えて西方のトルファンに逃亡する様子が、七〇四年の「軍官妻帯調査答申文書」に生々しく記録されている。こうした古文書を読むと、出家者と政治家が手を結び、その腐敗と堕落がいかに民衆を不幸にするかを、シルクロードの歴史が明確に証明していると言えよう。

（2）唐王朝がトルファンを西州と改め、高昌壁に西州都督府を設置した後も、高昌は県名として残存し、六四〇年から六五八年までは、西域での唐の最高軍政機関である安西都護府が置かれた。五県二四郷、府兵の五衛府のもとトルファンは繁栄し、『元和郡県志』や『旧唐書』によれば、約五万人の住民を数えることができる。また、出土する諸語による文献資料から、他民族が雑居しつつも、共に協調し高度な仏教美術の花を咲かせていたことも分かる。

（3）『史記』大宛列伝に「楼蘭、姑師の邑は城郭有り、塩澤に臨む」。『漢書』西域伝に「前後部および東且弥、卑陸、蒲類、移支は、これ車師六国なり。北は匈奴と接す」とある。姑師と車師は同名の異訳である。前一七六年、匈奴の冒頓単于は中央アジアに大遠征して、「月氏、楼蘭、烏孫、車師など西域二十六国を支配下に入れた」（『史記』巻一一〇、匈奴列伝）と、漢土に手紙を寄せている。それに対して、前漢の武帝は前一一〇年、従驃侯の趙破奴を車師に遠征させ、さらに前六八年には、鄭吉を車師の西方の渠犂に屯田させた。

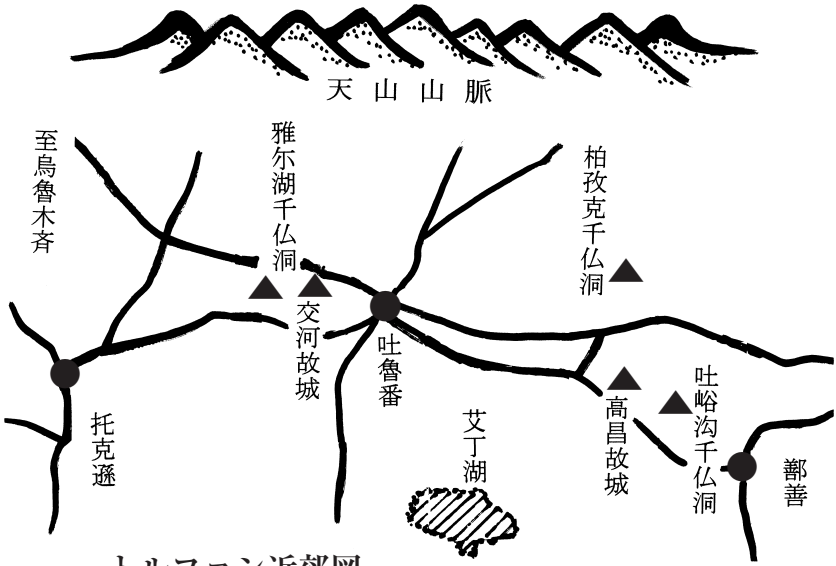
この車師は、前三世紀より以前は塞（SAK）と呼ばれ、それ以後は車師と呼称されたところの、トルファン盆地の早期の土着民族である。都は交河城、約七〇〇戸の家々が建ち並び、人口は六〇五〇、兵数は一八六五人であった。いま一つの都はジルサルであった。前漢時代の車師の貴顕の墓地が、交河故城の西の台地にあり、一九九四年、二十余の墓穴が発見され、出土文書は三〇〇余件に及んだ。また、一九九六年九月、交河沟の西の一号墓から、黄金のラクダや虎の装飾品、直径二十七センチ、高さ一、九～四、一センチ、重さ七七、三グラムの金製の首輪が発見された。私も発見直後、すぐに柳洪亮前館長の案内で、出土した墓穴をカメラに収めることができた。

（4）麹氏高昌時代の仏教を見るに、寺院は西谷寺・大后寺・公主寺・田地公寺・永安公主寺・綰曹寺・宿衛寺・郎中寺・和郎中寺・唐司馬寺・馮僧保寺・張阿忠寺・馬寺・朱寺・宋寺・北許寺・東許寺など、出土する古文書より三〇〇余寺の名称を見ることができる。九八一年、宋朝の王延徳がこの地にやって来た時、高昌城内だけでも五十余座の仏教寺院を見たという。当時の高昌国の戸数から計算するに、約二〇〇戸で一寺を支えることになる。しかも、寺院の中には数多くの出家者がおり、その氏名を調査する時、驚くことにトルファンの出家者は三〇〇〇名を下らない。人口は約三万人であるから、十人に一人は僧尼という人口の異常構成は、トルファンの経済を崩壊させる最大の要因となった。

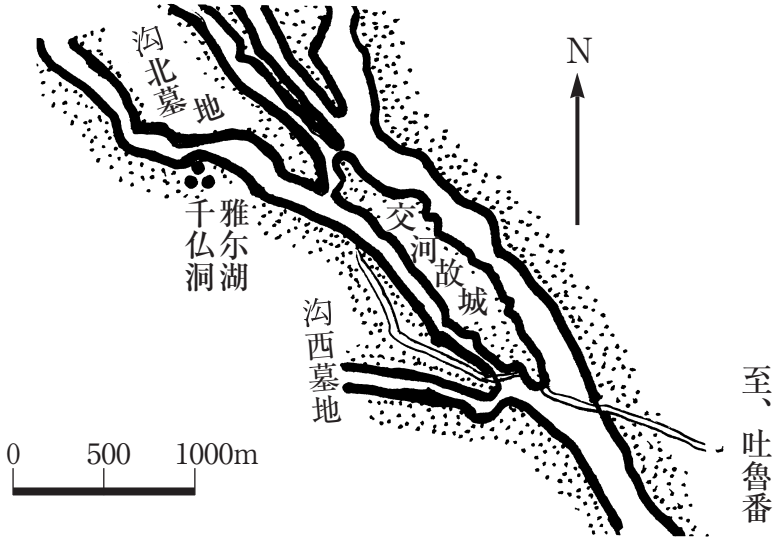
（5）ヤール湖千仏洞は、中央アジアにおける石窟寺院の建立の条件、すなわち、岸壁の素地が硬く、草泥が塗りやすい。風がさえぎられて画の保存に恵まれていること、また、直射日光が入らず、静寂閑雅にして風光明媚な地域であること、集落の騒音から離れているものの、村との交流が容易で修行者の衣食の充足が可能な範囲であること、そして、清涼な水の採取ができる河川か湖水が近くにあること、これらすべての条件に適った場所に、千仏洞は位置していた。

（やまだ　かつひさ・委嘱研究員）

巻頂絵千仏図（一一五〇年作）

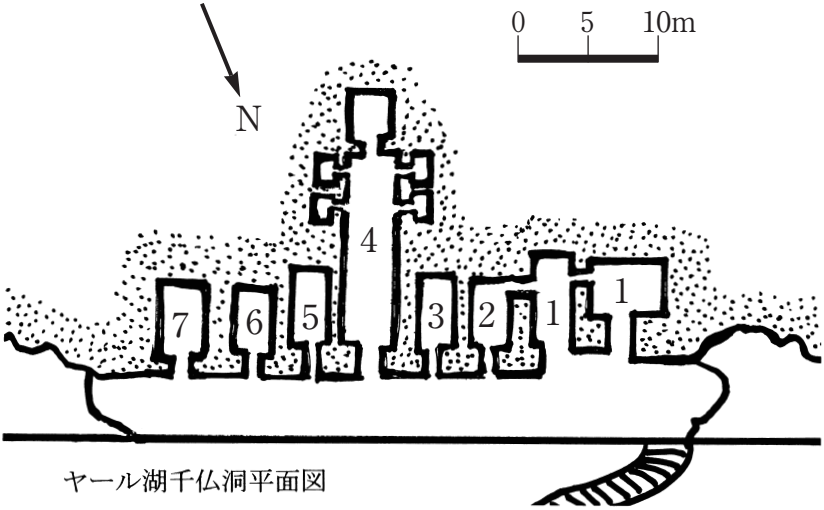


トルファン近郊図



交河故城とヤール湖千仏洞

ヤール湖千仏洞より交河故城西壁を望む（筆者撮影）



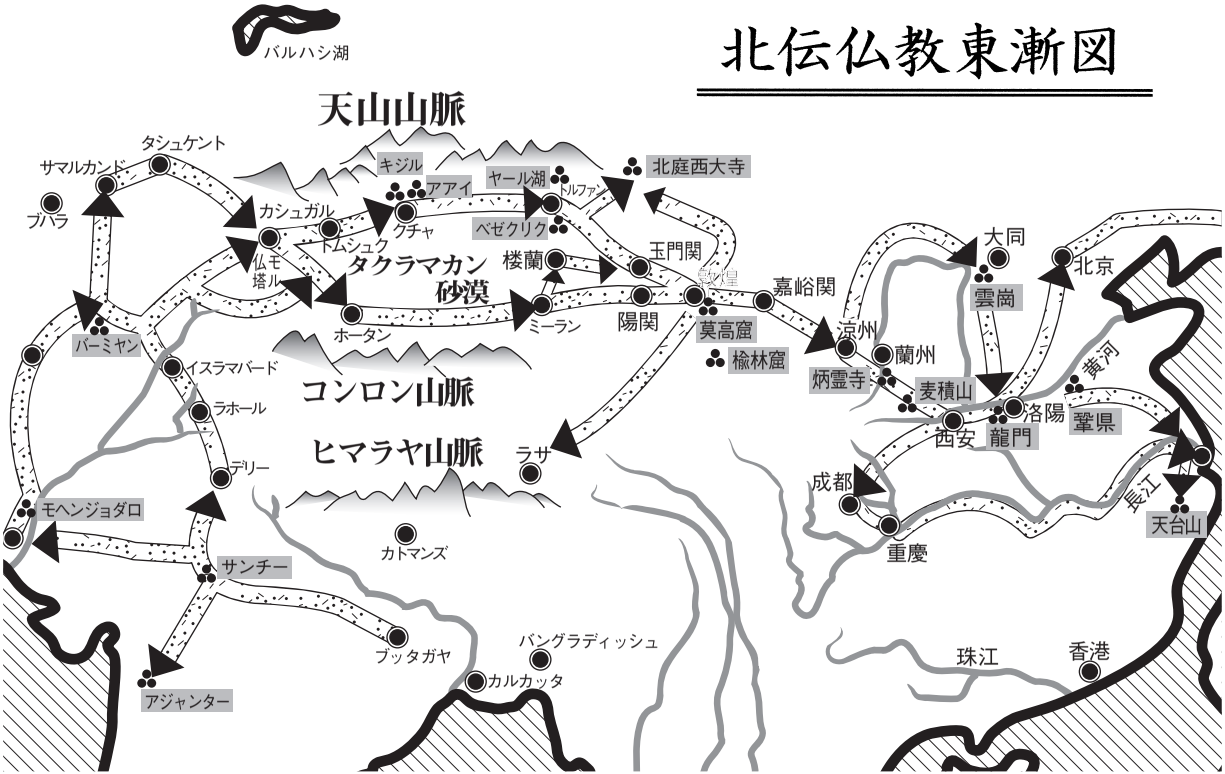
ヤール湖千仏洞平面図

ヤール湖千仏洞近景（筆者撮影）

天井の千仏、傍題の墨書は消滅している（筆者撮影）

礼仏図、貴顕の背には如意彩雲が描かれている（筆者撮影）

北伝仏教東漸図


バルハシ湖
天山山脈
タシュケント
サマルカンド
ブハラ
キジル
アアイ
ヤール湖
トルファン
北庭西大寺
カシュガル
クチャ
ベゼクリク
仏モ塔ル
トムシュク
タクラマカン砂漠
楼蘭
玉門関
敦煌
嘉峪関
大同
北京
雲崗
ホータン
ミーラン
陽関
莫高窟
榆林窟
涼州
蘭州
炳霊寺
麦積山
洛陽
西安
龍門
黄河
鞏県
長江
天台山
成都
重慶
バーミヤン
イスラマバード
ラホール
デリー
コンロン山脈
ヒマラヤ山脈
ラサ
モヘンジョダロ
カトマンズ
サンチー
ブッタガヤ
バングラディッシュ
カルカッタ
アジャンター
珠江
香港

Research Report on the Yarhu Thousand-Buddha Caves in Turfan

Katsuhisa Yamada

Turfan is an important oasis city along the Silk Road with its long history of over two thousand years. It is also a transfer point through which Buddhism spread to the East. This oasis city was recorded in history books as a place where Mahayana Buddhism flourished.

This is the first extensive Japanese report about the ruins of Yarhu Thousand-Buddha Caves, one of Turfan's historic sites that are closed to the public. In this paper, the mural painting in the caves are introduced, and evidence to support approximate formation ages is provided. Also included are photographs taken on site as well as a floor plan of the cave. Furthermore, I have mentioned in the notes, a short history of Turfan's rise and fall, and offer proof that the caves are one of the glorious flowers of Buddhist culture.